下

物語

三冊之内

アヤキ
ようこ

吉崎文庫

物語物語下

鶴藥乃落書生田森ハ爲清つ朝臣

儀状と送侯在儀の事

城方小は小谷ともおもくいけとらせ給ひハ

いつ迄をあひたりひ乃るゆ敷ふゆさけゆ久を

さ〻こ生ゆる筋に入をりおさはゆわ屋さ〻ふ生る

とも筋舎獄因の名をくるして雲と意ふ思ひてゆの

なゆわとりめて生けゆ燕をいけとりけ乃ちなを

さ〻を祝日をいそゆ久ゆ里〻ふ屋〻を乃

大納云乃ゆ〻へくるいふんくゆ〻りしゆ〻ひおゆ

つけてゆのゆ〻をかゆ〻里しゆいすゆ〻ちとり

てゆんしゆく西素を見つきゆ〻ひの義理微よ

黒川真道蔵書

りつくゆうきんなるかゝ所而毒の多き事とも弓
矢とる方乃なるひとそこゝ後りはゝ殺ぬみち
乃りゝきおもひよ志川こぬまはよそ丹見るめを
志ゆ毒ゝと云ふあの里をり中略よ里鳥のゝこへ
いとく余島乃事いかに及りゝつゝめ毒吳朝乃多
成を禁獄の沸さゝ不仮乃次第他國の思ひを
とゝ別義乃法ゆさけをりくゝゆ遣はなん
ゝゝとゝもあまをゆ敷さすその物りをふう
ゝりの鳥乃ゝらと尾乃ゝ後きりあり多所を所
くめつゝ義事ゆやあひて後冷泉院のは
時ゝそかゝ所鳥をあふゝふこの國りゝそまりし
をかゝりて見せゝれゝりしのゝゆ物の内物

たゝひなく世よれゝ後ゆ多あゝい
ゆゝゝゝゝと雅り物をりん
と後しなん世ゆふあまハちゝあゝおもゝ後多
りかとゝひゝゆゝゆ中略乃まへよ後書を巨ゝり
山ゝゝゝらハゝ後くなをぬとも
ゝへさゝ物ゆ法を丹つゝくゝ
山蔭の故ゆ山高沈ゝのさ後りもをゆゝ
ゝさなりあゝをいさんや燕乃左ゆ丹りゝ
よをそよゝゝん世してきやゝ内きなゝを志ゝぬ
物ゝりゝそゝゝゝゝ言ゆいゝ所を天下乃事
さりゝ物をゝゝゝゝゝ他をゝゝひゆをゝゝ下ゆ
乃ゝ所ゆはうををさゝゝりゝまゝゆハ口をあゝを

書よあつてをふかたちうさる風情みまんとも中さ也
芝花ふきやけうちちを濃色さうんとそおはんし
々ふ変よあるものゝ云ふうをけもくゝとをかゝ
あとあてハいをぬふ空いへを落書いしとわわた
ふ字ゆまをあふさいひうるまくゝ〜ゝはと
いふさてこの言をよめ更

另乃をされいやしきのみうを孫さん
ゝを海〜ゝうゝ〜くゝてねをん

鶏の法湯かゝ石へ山雀の枝又とうひて祇園林乃
あよ立ゝう鶏毛を見をく大ふいうつて今あの合戦
ふを自余よハ月残かくまゝ山雀ふわさをあひて
こくびけうんて一志鶏志めてうれめをみをんと

そのゝをりふあるを者鶏りさをあまくゝて盗
人のは逃石いてのなるいくまふそんやらんさんは
西月ちきゆ事ふまとをもわまらり先祖をそは者
くゝをぬうそうをりふ狂ふ郭云のゝ乃科を云
てむさゝせめて花角ふるまくたうひに死せり
かとくきをいはもをりを思おてこいゝ号かとく
きをこの吗人はふハ拭ふいくまはな利はゆへふ
鶏をくゝて毛花ゆ仏ゆかあをとそうを重々ふ祇園
林ふをゝうひ西祈ふ不ゝいく田ゝ乃死弥
ゝさを重て云昨月一月の合戦仏ふとり乃刻ゝ
及ひみかゝれいくゝ庭あれて森乃焉源つの先仏
寛後乃浄拭あをりゝとりれ刻のをゝりふはゝ

めさまして生田川よりまゐるのひんを見やりて無量
作とそ松をうゑ出をゐまは今月俄うゑいて響乃
つもをれ丈よりおうひうのあふきのひうさあつて海
海ふゝ川山野乃万木雪はれ木をゑのしらかゝる
ふけら迄に屋山原乃りやふら迄をまへうし海
歌ゆゝてちんさいちくふきはまをとはれうくゝ乃
わりわみくさ乃いくさ迄てにやふまぬ生死の時
芸急よ刻未申弓矢れ義伝そいくひせんゆゑふい
しそ波のそこにちゆむうゝむらくハ素と死を一
平よせさる事と藤戸ゆ胡塞うとうゝ墓し
ゝ成く熱書をきゝゝ分屋うまふ伊あへ仲ぬう唐帝
ふあろうゝ拾しひそうふ恐恨を貴備ゑにのふ弟い

いゝつゝに西海乃波よゝ川むせいふとまたま
あハ伊そ東山林うゝけらさらん不宜侯
九月六日　森爲湧門尉

謹上東帝侍殿
とそ書たわ々原うまと云あまと云大史うゝを
て言於山乃位倡佛法僧といふるハ爲のたくひと
いふ世のあわかまゝなたのみてうんとてゝ為みふ
てうそうゝを松うゝ云
祇園林爲餘　金財峯寺衛
結殊蒙一味同心合力以佛法傍威力速進伐邊於中
略住山城守漢書正素書中其舎瞥松風空言野山有
浪道容獣世務利書業上家寞死人岳世人呼号佛法

偽訪拔則是我等民族爲烏一類六云依之爲眷馬夫破
邪敬正佛法大庭罰惡賞善天道所載至可罷也天罷
而亟素其心猛惡又放逸也元亨生夏恥他亥玄暗愛
隱侵性貪慳至內見驕用眼字撥塞耳然武王荷欲明
誅亂之指藉重疊其咎如山曰茲今月六急起義兵
押寄中鴨時音矢合鷄明始而大手搦手及五十度出
火戰以名其思恥伯輕令塵芥還重之義令石必輕骸
定屋所內血流涌鹿河絲馬踏塵掠天上率師呼鄰者
雲及雲集首唯雄交及身方死亡已半戰士夫氣不堪
合戰中陣列退定廻計軍籌切馬射兵落力悶絲矢孔
刀以未噬若化三宝冥助何以殊戮亟素憑幼他已不
惜力令況於雲仲黨設雖爲冥在隱士勇爭不助一數

恥辱令有山中弦島悉弛僅逮疾可有森洛努〻力及
遲怠故除状

烏鵲元年九月日　　東方作林玄玄

と書てそをくりそ原其色錄云
言野山色除

祇園林御

来錄一紙被載可殊罰山城国亟素散其憤夏
竊以玄如一色推縞黑白法身元相何善悪雖拙元神
一念迷闇忽共平乗奥足佛顛倒元明迷雲蔽濁常住
妙法月以来三界六道沉惱不知其期爰我等愁眠多
生善因生来古幸以逢西教誠是優曇相現盲龜浮木
喜有餘者哉而今死一善蓄石火早敵泡沫散法迦像
何臭銅焰孤燒数雖多推伴黄泉遠旅親族雖眠仍助

琰羅裁斷思皮衆山宿寢死安心抑言聖山八葉心連
於九形高上去世峯ゝ雲頂山深鷄足山
中色衣服攀山若罷障悉滅居皮輩出離速進依之任
大師入定傍唱三宝御名祈一仏佛果之所願不慮催
安而悩仏思而斷腸類水浪波耳若後有幽若可易所
歎思屢觀既立願戒无慙恥恩若當沉三途八難苦海景
色永共二世悉地久苦三恩牢獄言語道断之次第不
可説之四色録

烏鶏元年九月日　　栄門妙鳥

とて書ゝうけ給

鷄海冠將士移法九月九六日合戦移警發仏事
去去ゝ拙を見くさ——ゝ色衆法ゝ言野色同ゝ色ゝ

ゝ色ゝ色へ衆とて鷄海冠將士ゝ族合色知附云言
野山さやうゝゝ世はとて合戦をとくまるへ衆
ゝゝ色ゝ色ゝ為ゝくゝかくを
くらひ仏ゝへ衆今度乃合戦ハ分ゝとりての
志やうゝひと為ゝ為ゝ為ゝくるゝあゝはいきて
ゝたひ清目ゝかゝゝゝ色ゝ色ゝ色ゝよくと
志為ゝ子とも色はひゝ仏ゝ大和國
立田ゝ寄ゝ為ゝ色ゝ今ハ思ひ重ゝ為ゝてん
やゝしゝ色ゝひゝゝれゝ微ゝたのゝく為ゝそ
覚え為ゝ先國ゝ世ゝくゝい法ゝ乃鷄ゝゝゝらひ
ゝゝ小野ゝ鷄ハ合力ゝ為ゝ久ゝ八幡ゝ重ゝ勅ゝ子
ゝ為ゝてまいゝゝゝと云立田ハ位右一ゝ乃ゝゝゝとて

流浪すまへ力及ばぬ世なれくにとりてハ逢坂関
不破の世きゝ次麿すくうきゝ世ふあ〳〵清見ら
世なれハふこそとなこそ衣の世きゝ下ひをかハ
まの世ふ〳〵門ふ家うやはるめハをふあまらを
ゝめとして国こせきくゝ乃面こ万隆をさゝ玉
て合力あるを〳〵宮廻久を軍ハ来廿七日ゆそ定め
々ふさるゆとに九月廿日ゆまをあをなをゝりハ
中略ふはめんくゝつとひあつまをて云今夜云云
を国をあとくをかゝらふそこくの勢なるを
きうへよ諸ゝよりきを大勝ゆ敷をゝときこえ
ほゆ頼つる諸越後ちるをうゝ云ゆゝて一方乃大将
ゆゝう雑俵ちゝくいうくをへ義秋をたのむを

ゆゆふ対乃ほあそゝ信濃方大明神へやさん
とて今宵ハ合戦歌中乃与力を国よりをせのりて
ゝ乃ゆの多勢なるを〳〵と風安をう塩まゝんす
一宮さるを〳〵いゝくゝ清うまゝ分へ義と中せを
諸方よりハ雲の一数さゝ清うハさる信濃よりを
八幡一郎乃清事とそ始を所宗言を清うハさ義
さ義ゆ安社の清勝あるひハ雲となりあるひを始
となをて警脇と引具してそ向ひ乃ふ西素ハ指乃
思ひふあへをたなちゝ後をあくをそ指ゝくゝみ
うやまひゝふありかゝ義ゝ乃ふ義逆なりちゝに
云云云先度乃合戦ハ敵をたやをくおもひて
あるつ義ゝふたをまハ西素ハ男ふうきゆ

あてかちいくさして弦事ひうゆ弦和ふ迄とも
敵は八幡住吉敵方の法勝を中ゝ多しく海たの
を引卒してむかへるかと敵ふ多輩乃いくさふたよ
うけまけて家古をうかりん非いくさ非通自在乃
矢さう紀ふを伽りのうあわてたまうへ義安たゝ
為れけよさちはるわし脇のゝとてうんたう
ゝうさ迄て云めら迄なをふとか敵へ来うれ為う
そも年か迄りん耳てくとそ志うう稍ともあつさ
号よをきあろを引うんへしてみをさ海くふ
いうさ乃をうあとをめくゝしけふふ城ゝ云
月陸を新兵衛むちやこゝ二ゝ月けて新兵衛は小島
城海ふさとにかゝうゝ申きて敵ゝ世をとおく

昆沙門堂大海大原清ふ給ふ人しよ世ていせん
を為の一紫ゝそ云云うゝ和をひきゝりをちさうん
めんくゝよこゝをたてく一刃をにかく敵も引
を思ひくゝ有利今家ふさやうふ伯角ゝみのさい
河原中おうちおてひうんへたらんを見くを時敵乃
志ほん一もかくむうふ時ふきの時一をひ
きをひき城ゝ玉てとけくうへうんゝ敵
あまかと乃無勝を一のゝにあ原ふらんとかうん
する而を云ゝうくこらへて一合戦火とちうん
時海方八幡のはせい姫鶴乃乃ゝ様あひかへ
ゝうんへあんよお遠して惑いたくうひ惑を引ゝり
そきてよせてのいくさ志と海ふらん時ゝうゝ玉

而乃新発意ありふを大勝のよそおひにて姫をうし
さふらひうちあをせて、おれをあ〜馬つれ牛つき
を聖さまの門をいふ色のうす青へかたまんけう
ところを大原はしまうの里の野わきともか
よこやに射あわさせ門よりひむて〜移れ餅屋の
餅よせんせいへをめんくくうんいとそ用し
〜ふいくさの日にさめ〜のハ孤薗林よハ一き
らいんの方ゑ多記出を〜まんたを善て今夜
中鴨をせめおとさすを〜のふてうへら〜ゆ念打し
非水戒のかく兵庫いくをとと奚念佛者ハ六字の
名号をとひふけ法花宗をあ法のあ字をうさ云
ふ書られて知恩院孫宗とそくをらをうちうけ

なわあうふれ鶏ういくを赤色のはあひをきて
くをらを〜あいかまてきを〜姫のやうみそ人こ
ふりくふ知恩院ハ山家れもやう神よ重ひきうを
たてをくくのをふまれ来ハ亜よおかにうかゆり世尊
吳山舎上ホ〜て一投の死をけくを百万の大衆
かつてあまををうを麿訂迦葉のをひとをみせう
を時ホ世尊迦葉よつけてをわまを西法眼義孫くん
乃妙心あわなんちにふそくをなるひホの雖り
勅して不就乃付化たん世尊をーむるあのまと
いへを法うしまうの〜と商那和修優婆掬多
以下ふくわ最して今よさうを生利うの死ハ見
安芝知不計北而及知解思量文字ホよりハ貴理よ

あり〻すひのきやうして色なふをれそせ見る
色〻ちうわといへもいまさ十成の孫よあ〻する
う〻ふ山宗九和門ゐ教色〻法宗何不懸といふとも
武勇ゐは孫相逆せう歌よゐ合てうんしせうゑ
合をれたんてきのこ刑よはなし酒ちうていせ九
もやういく法む会仏い史をちうる号也今乃
時分わさ〻乃〻ひくちうあるをう〻すとたえ
ふ逆色法死宗九云さうんひいうんゐ用くんへせ
この合戦中ふをいてのてう而色はやへ幾そとそ
わうひをる比を九月下旬なを赤山紅葉して
季秋その奥をゐうち祇園林ゐを林るり酒をあ
たくめんと紅葉をなを石上よ詩を色して緑色を

ちうひなんと詠してけりとい与ものんみくしき
目さ和さ生ゐ大勢拝参乃車なを色ゐをもあて
しそま花ふうり孫して安をおもひを鹿乃声り
又うちそふ松ゐなをこのもしの声うく風の音
いり逆ゐわをまふをこ〻ぬと和ををう〻孫ら
まねく思をねゐ中を長月やあ〻ゐまゐる暁乃
涙を涙ゐさなう〻に云ひ逆くて角ら接乃於涙れ
ていしそも九うけ逆ちうち死よまいやく九京男ひ
く父母妻子のかさへ〻を見を送ゐよあるひい
さ〻ち孫ん玉て逆とそ一をなんとゐゆひして
むさなまゐ我ゐ涙かゐをきりてゐふ松人うり里
色のうるをさの小袖り方を書そへて涙りり

多ふしそあるれなきさるかとゑ国々の陣地
をあつまりて去玄う方ゆはいおりをなせ大陣
なりあくれを九月廿七日又乃天よりそよそて
大よりめてと交を使く敵を里意毘城ひくく敵
なり警かくさはハ足なるの下出てひくへたり矢合
をしめてよせてくるかの思ふるるるなきはいの
あををくみすくんてかくゆ時ちと引ありそけを
かつゆの敵而下坂ふうく里てむんを定とつて
くへーて火をかーてくうふ意乃大納云清う
せいゆて大将去玄うよりあひたり去玄今
をさいあと思ひ切てもみ合うつけうとまけ
ばくへーつ川をかちまけみ急さる赤下

思ひかよあるよ敵方住吉の法勝寺こあひ下
入りくへさきをこらへをしてくをつと引ありそく
鎧の海尅乃博士大陣なきはいのてうあーをたむ
へ来ひくさ引ゆひく知時爰こそのうきぬ死ゆと
いふまくゆよ陣三百騎をすり一足も志里そう決
意警乃信濃方手にうけあり勇士をくのゆ
あひあきをよのつをひにうあふて花をらして
たくひうをひちゆやきかちのうを迷ひわう
ゆ一陣前ゆれつもりのりたくうひおうるその
をさ後いうちまけせめたる中将基乃をんれうへ
所さひしく弱乃足なるこ入みなきて風凰ハなれて
八方を敵上り飛警角意ハ感をゆるひてあるわを

ずいぶんひするそれらさらむかしの屋敷の跡
やふらまつ海くりの浦まくらまつひと里を殘らず
とたくひさうをとりまとりもみのさハたんとなる
ふかうて敵をいやまゝみのうきぶかうなれを多勢無
勢かりしして知河きりをあつて一名字百騎も
ゝり海くらをなくへく一所うりふを玄玄あまをを
見をゆひう記ぶ去ともうかたハうりの大せへ
いくかとあく敵ゝやふらまてたのこたう一事
乃大ねうさけるを会さよ玄玄はあ後ゝふうく
らんをれいこかきうをぬそれせへ大百姓たうり
忍けふをたてく角くふとうりうまての
あひたのとくゝ小島今屋ふ里をとうりと天乃

こ忘れたそうくたゝう絲たまあ後敵ゝて
ていまふゝてこかを南へ向て乃玄玄ハ子勝三百騎
ゝうかそ敵をけや山りうくお雲後をくゝうか引
て行所城昆沙門堂大後を大原ゝ乃をうり散く
射ふ大勝をいうろさ敗河原をみなこへ引者ハ
こかくゝ門ゝりひむてらまてうこまぬあくに
物ゝを司をふう入し大勢よりんとりこあらまて
馬よりかまたりゝうてくゝ代者なまは一方うり
やぬつてうし後へつとぬを市へ乗入てそをを
ゝりてむのひりこにうりあうりあ方ゝるひりを
くをして中勝のめんくくうりハきくとも水
まんハ清大事ゝかとそをあらゝうゝハ敵光

をかくひとへ[illegible]あ満大浦源義[illegible]なきのとそ
ときめおろかなる去ハ甲百計ゆて祇園林みるけりへ
ほしふ敵ほくひくせめ来るとやうしけまたせん
ケとかく足よいをは[illegible]ものいちよ
乃あれなまは三乃山をたのこてやこ去をきんと
紀の地をうて義ゆく而を国の男公ふ祈しー五
ぎる和寺乃浦れうう警の森の警わさ里あひたを
熊野へをうかりいくてれ表ふ義里々ふをはく
ひて責られもらくををんして為乃とくくり
たてこをふ拵ふの城とやハ江南世双の世川所
紀列才一れようひ行利峯ハ寺天れ雲をさうん
さこ若ハ壁立方仮世乃はたひさうく一ふあや

まそハよ足れそうのみちんとなんれうさひ
ふくおりしをよら惑ハ斜よ信ふ一夫ゆのつて
せさふのそあハ面万をかふ句ふ面うはとうやや
うんふくれ関乃ぎんなんをかくやと思ひたうま
たり去去こふの城ふーて思へらく西素天下の散を
さ[illegible]ふうひたせ[illegible]ゆとれらて一こにたゆくてめ
なんふ面素と思しふうんのきんめとそまのを[illegible]
こふ素う勝けまたあ[illegible]ををてくふ法をたたひ
て高於山りりの行ふくの院ゆて佛法信をふ
孫てこう徒不面乃ふくきこひふあふく弓矢にとり
まけなこう法ふをこたくまりらたうひなき命
なううへくあまを易まいりてはいきての孤仮事

うあまふ三うん今ハ老をせんちしまとして道世
仕うんといへもうんはいかゝ合戦乃れたりはひうす
なる拵よ京乃名者れ初拵はしるあなりの人
みやとなーにゝ思ひしゝはたりありうちは
つるゝーく日比のはゝまひいとも人へ老を
殺心のいんちんとおもりりうゝはゝとふ
ありうさくはあうし孫うんゆはよ昨夢といへそ
色はううさいよはきともあーうれ世孫うふへ義
ふはあらはいとふへ義りはゝはゝ老をなく
そのたんてきまて也一さい善悪をへて思意はう
事なーー也して善悪よつきて念を引きうふを佛
法ゆきさゝひんちりうまとゝとゝ世を拵そのふ

法うさ後ゆてハ西素りは遺拵と海ーうんと生
死の苦域とりか逃て安未世界よいさ里たまたう
山城国乃おんゆて作ゆめ山ろうふ里竹ふ屋ー
微りありかゝきせりうんらしふを里次ふは落餐の
一度一七日ゆいー三七日をを屋て難行ををうさ
きされはきうんをも見中てゆ拵しを屋く久世
ありゆまりよ里ゝへた屋りてかゝ拵わ衣ときせ
々ふ玄玄別ふ法名いひ作ーふとて爲ゆ弥施佛
とそうのゝ々ふはゝ拵ひ乃東ー尚山成焼のさハ
玄玄を屋ゝとりてとんせい者ハ念仏ゆを拵
ふを大かゝ念仏者のやうなを未世濁乾のきゆは
孫んゆつをりつく寂用とをれあゝたの三ふハ

法報應の三身を假中の三諦所生本来の佛性なり
于如森羅万像は三字なり これをいのと云い色法の
ふ仏定 諦法身 必来孫と云い現世は子佛 俗諦 報身
必来施と云い未来は子仏中 諦 應身 如来阿の字
を唱ふ是を八十八使の見惑 九十一品の思惑 総数
する孫の字を唱ふ是は無始 劫の塵沙の惑 障を
断し施字をとなふ是を四十品の無明の根本を断
を三身といふ 色法身八 生仏一如の理迷悟不二の
性 報身の妙法 蓮華のかゝちは大悲 因の仏 應身を
八相成道の如来 操去 出現の正 覚成 しやをそ
て 利益をしわを 是をさくしてをそ 法
門をしおもたくひをさ 弥陀如来 ...

法 法上人をたとひ一代聖教を学といふとも世智
辯聰の厄入の身なり利て只一向に念佛を勧
ゆこそそんへみ浄土宗をそて 法西西山 ...
それを ...
論 ...
念佛 ...
晩学の出家なんとのたやをくう
ゆ 婦へ ...
ふ ...
ふ人へをたく ...
め ...
ては ...
きそ ...
生のやうの ...
開 ...
を ...
法 ...
生 ...
ゆ ...

あるひを八劫惑八十二劫童花ゝ法華経講
乃至よのこゝありうて見仏聞法乃微笑をひらく
あとをなをするゆえ天地あをめ安養界下界下生人生
蓮花中常安孫施観音菩薩法華経乃童花乃中云
あゝしくくまして化佛化菩薩来てたゝえ法を
とくなり乃こたゝえ為ゆの孫施佛れ云ある云よ

拾示ゆうんとおりふ云ふ法華経

地獄よりおれてめなさゝう

と云あまいひとへに孫ん姫乃平家ゆはそむき
ひとなんてあるねん姫乃有り不審しといー
地獄ふれそれをしめとゆいゆ時ゆをうれこさた
まふうはたまりわそゝもとうおそろ〻京地獄ゆ

れそ見ゆれおんてもなきゆりのゆきき
なのゆうゆや作ゆうゆうゆをうゆやうゆ天しなゝて
ゆ先哲乃きんもくを作ゆれ石歌の雨路を明ゆ地
也天竺乃意地獄よおゆ乃ふもゝめ何乃ふもんう
ひゆる時ゆ馬服腔胎ゆ絶しを時ゆ地獄うきゆよ
行らてうまを楽とひゆみゆ人天勝妙乃楽よりう
てゆまをゆ為うひとひゆ無地ゝ〻ゝてゆ縁ゆ
変ゆんうを天竺れゆ法ゆまひていゝへうれ我法
生ゆうとて足ひうを天ひく死者ゝゝあきみうて
うとひけゆゆゆんゆいゆうゆ大出ゆするやうに
作うをうとひうゆゆ勝劫ゆう根に上下ゆう化
他のやくれ先をいゆんゆ地獄〇れちゝ先思ひて

ひさすみ浮やんへといへゑあゆみくさくにとて宗
の戸代明く迄え松風乃音のみつけても想しく
足と西方ふりえこりはと云るすなくなこあひを
ましてそ彼里々のちてに山城なハ合戦ふうち勝
て瀏庭ときこえめしふいその加殺宿因う人法のつ
くいう紀世代変化とくれんはうふ色めし合戦の
あはさ夜遺骸さつとちらし共枝ちりとまいて
さりとた子く里しかまんあやうちふを店舗乃
うそ子と本利ていさつしふまときる下に名のこ
おせり胡より紅葉あめて世ひろはあなまとも夕
ふち白骨とあつて郊原まくちぬといふ事ゆ夜
さう思ゑふまけく世るりのうくそかわふちた里

むかうの道心むたりてこの有とハ妻子のんそく
乃きれいふさ身ゆいうれおうそふさて惜縁乃露
松風松かく拙さひしくやえけまそ
法林ま裁せむへ黄山乃さひしき緑
今なれなふらふ訪のまつの梢
思まひよくのふしみをむなしくしてうの高野山
ふかの祭京帝法とさう孫々家素玄思うけさるなす
なきはいのなるうそとてやあゆはさやうの為
仏来ハあましふ出なしといふ正系なふをうはなく
うりんらん清直世乃事ふしすふ來てそれりしを
ともに世といとえんとて来つまてハ自代をさそてハ
俗氣ハ残人ふしそかうるとの一まいるうへえ法

いきとゝ成るゝ物もさんきをはなれてかふらん小法師原
ゐをおほせ付られまいりくの若氏庭ゐをもうるを
をもをらまんよりむしへ義命にあるとゝいへを
このうへいとゝ多いめんを西素玄云う替見うる
きをうきを見く涙をかうして云のりかさくは朝歌
むかんんのをせてきたるゝを為をたるひ河をう
ゐくうをゝかれるゝ夫方ハ我おう一数をしそはゐ
拙弟もを屋はまいりくををうわかきはゐ成ふ
見をせんちりをとおかりめりとりて法とんせい
以如拙ともゝ法屋ゝるの合戦より世乃
ゐりを屋をあんはるゝ今日ハ福ハ的日ハをき
ゐひなを屋一とゝてうゝ後乃とまるゐりゐる

ゐゝ北七河乃ゐりを屋殿後経をふを見血聖原を
ひをせゝとうせめ一人ふ海するむく升面却ふ却
ゐを尽しかくくおゐえんるのやうふ思ならは
とくくふ家浮うまりらんといふらハとて髮
を拙ゐ衣をきせられハゐまを自警阿弥陀佛とそ
つきふるふちとひをくひをまともをはくくと
てをまゝ後ゝちんちゐやうなる猫門なをゐを
なるうふ白妙の袖ををそゐ乃衣ゝりゝ浮ゝうへ
いをまゝをうふ衣屋なゐ拙ハりひハ書乃婦ふ志
をうへ里海ゐをふ思いまをうをゝまゐを拙ハを
ならせをいとひなをうをゝ法乃名字をををををハ
ゆへをゐゝ平有常位のひりハ法のをとをへ来を

かくれ乃志也あへきを所驚ハ忠孝く為ハくれし
まうちをしくなんそてんせいハ乃かうちをあうた
むへきやまかきせ利生門ニ出家時志りくやく
そくまや髪をそり衣をき於衣ハ掛すミきみして
黒よ染りぬ色黒白ふさいかして稽警一味乃あ濟
をあうりぬりく於かえさり警ハ弥陀仏云むし三
井寺山門乃ためニ燒たらりけ坊舎一宇も残らさ
里しりき於焼あとく尽方ミに退散せしふ毛
修学者一人新羅乃御宝前ニ参り了ふうくわうる
乃城亡をあるけ於ほくけいとゆこい乃法味を法く
者通松三ミ里し法義按よなんちかけくてすあり
まミの龍蓮を和光方便のみ由あって一人叡山燒

無上菩提心をたてことこれ不よりて日吉山王をお
も大りし観音をまはり寺門の城亡よ法こゆても
あうりゆりを志めし給ハ所這をありふ小今夜の合
戦も怨霊祇園遇結縁をよりりく我ホをあれくた了
三ミやく三ありいまみちひふ所ふ邪悪りとあり
りさくいとて浚をあのせは為弥陀佛ふまく
とてよ毛不被をそ云かりく為為あこたぬう云け
まやいまへハ毛を色ふそしるう於乃自他
乃衣一ふして稽警あゝ法を於れかしく毛仏法僧の
通事し云如一毛世誰ゟ黒白を論さん法乃無相
於わ何そ善悪をまうたんせんつるあ速ふそいや
さし毛黒白の義論を法くし闘淨乃我執たかく

したりひふ寺尺迦羅のい示ち成王をかしに
今ハ世二乃仏俗と成て上形徒生れうてなる
ゐんすよ法こひよあへ正言恵不二形面十ゆ思の
を世作といへいおかしくあるのさく作とそよる
こひ々ふかくて三年れ形色ーうハ比世祇世月
わ〜ふまー形ゆ面の言ゆ寺乃素と見けうま
て安も祇をうれりー法りのあをれなる和を正
う〜庵山面夜草庵中白髪高施万恵元具素愛祇庵
假夢万年仏事樹頭風といひ一白居易源居の
頃思ひらまはく愛氣膚をいさまーめ境孫として
魂をけ正茶ゐなく酒もかくス飯をなーともう
世死まう一法の中ーふ法れかふふ形荒なを

伽うかくく宅思へ世口ちうなる相とそい皐なう
てをあうハこそ服中をーうれと成ゆく祇事
あらふなるるーふ左俗乃くをゆ者いや意しうり
きん為阿弥陀佛云今ハ俗孫き迷ふ迷て世留れ
すにな世てあやうれ而なーりとより言野山乃愛
乃素ゐをいゆや国ををめうて世をを廣く成し
いゆ迷もふひとつなる迷はめつうー義而をあう
む志りー庵をむをひとく芸いかふ乃田地りれて
田為ををひろいてうへをさく え秋を山家村里れ
をゆのををーて稲ををうわちかをもひういて
いよく伝祇と紹隆せんといへも警の孫陀仏氣
をそんして云尖方ハなま移家めてつひふれちを

ぢぬるものとのこゝ作ら迷ふそや祈の結ぶ警蓄雪
ふ五く因文ふすの月戸花他ふ似すなんと云て
我くをかくさ乃とく祈をはうゝひ久花念仏ふき
えんゆりて山ふ住す爲の弥施佛云我ふを后勢
の八白忘拾宮中に爲の印をいくく銀河波座ふ苑悩
とゆけとい警のこたゆ伝云まり山ふ中事と沸
安くへ分の田地いりまりふるふ新生山田
地ふ海ふてこそ生ふ起ふをらんまんしくへ又山
浪林里北を海井いの祈北おもむきくや山義勢を
と迷は漢義勢とふる農郎農夫乃ふるまひ沼山和
高乃佛祖將布のすくさ知祈ふ十成苦を伸くまを
そこくとんうんをふ歌祈花は不ふ乃一理とう

く作ら迷くへ屋をうは世つをいのなゝふうふ
や苗世の祈を見るふ偏ふ地獄乃系とのこ笑えて
いよく候北浄去乃みすくみいもとふ祈ハ拾
大系乃法ふさ一五て候せんふはへうくへ義
のふ迷は未世とをいくへさる名近のみこそ多く
ふのこら迷くへ見ハ邪見乃たくひあをふ五俗乃祈
ゆ中いふ海ふこふけ迷は祈蛇うんうんもこ祈とを
こうは惑ハ相ふ拾くう感ハまふ結て知識乃人を
もかめこう祈ふるや西法をふ未来祇ふ祈乃僧
乃ふ門て先法の法則を屋ふり安知乃男女あつて
法乃祈西とこんをとあり今ふ時代ふあひあさま
里いり迷をめくれて一なる迷は四ふまかはふ法門

をにあふぬのあさをてかひきをよ〜ぢ仏ぬて
皇位をそうしまんすまぜやとよわ為心なけまえ
一枚よすぬの座禄ををきをしやき拵計乃一飯をを
ゆとこにすれまままて孫白ハ僧乃是花を云陸
羅乃袁を月をさすゆひとてあまをきらひたく祖
師の云白をいさつ〜ふ門をたくく尼妹とて色を
をさな〜ろんきやくすゑ字ケをせをうケ科ぬ
いたくうをくうをあ〜は繋若のをちえんある
へまふくくのしくきれ禄宗ハ地獄乃孫とやひす
ふらんみをゑ字乃みすてなん糸不足ゑ字とて
ふとんのうへを乃んちうを見みさたのかきりせ
をてよを磨の安仏倡よ事上よわ仏解者氣力ぬ

と云ふわみ字を解ひる者ハ是氣力よりとえゑ
さとりひくさへ文字よるを入をうくしそ乃へのふ
ふまして不解み字のきまを是花を云てハ世を乃か
惑ハ尚ぬの仏法を是花を云と云方を一器ハ水
を一器ふうのをと云ふを他宗他門乃猪よあら法
ぬさ〜く見まは拵宗よいひ僧へさるしくの業を
ちち〜すやちち〜ぬのこなるて焼ゆかいひおれい少
智ハ芸拵のさぬふ激ハ思ひちち〜をさちをし僧
是為よ人くをを人いと有しふ因果撥無乃ちち孫
宗名利法世の悪知識あしふをかよ云云てをひり
成乃理ひ立へ業そ人をを見るあを世法字ゆを拙知
ぬしそ活計ゆまを乃んちうひををたくら孫乃拵右

獄のれをれの一ぢよりあるを見ひとりのおき
らふのけあるを一度さとるうち人れ乃学るまた
教力故も見よりかさいをひとう成るを至東れ禄の有
様をふけんをされとしてきをめて不審不善也大
なるハ大ふつき小ふ教をふ又小につけ道ほたりの
義よそむくを君乃あさる役ふりに号夫れ道乃
為なるを巧妙かまを一度禄法をさき明して会仏をや
を為を一番世弥ほもや教物祇明然乃そう世いれ
腎虚編執痔もうたくうちんさいこやうりんを見ウ
らうさうら引をいひやうふ海禄法きくとり法門
伽こそ結及言白ハ如ほうれと常にさえつる白ほ
りてハ絶漢蹴を了莫高相徳磨ふされ三十捧及

ふ五てハ伽くそ富初の一白叙又上者撃竹指下杖
て上倩女離魂祖師西来雲門乾屎橛牛意擂又伝君
ほふ五てを向上向下理新拂関刃八識をくを里を
九識乃禄ほ刃善を徴しえさる結及をふく唱八孫
世ふ禄ふかくのしくされ輩ハ人里て大衆謗
傍乃罷をえんこそ濃まりれ会仏者をは小乗と
てきくへせふ如そくくハ妙院乃成行世は一新恵
越ふ行ふ海一度地獄のう毎座ふたんふと沉
てを法ハほ城をり足をするとてを進うを立て色を
助まを一禄を以を孫施仏者をかくれしくされ教恵を
法絶乃一会ひ原を色し法を名を一あう唱ふ連を教を
志原を引指を表とくく社生し妓楽歌詠乃変

立て来迎の雲まちうけてそうりのあやくんの孫
宗乃地獄顛倒さん殊よ玉泉乃ひろまりをれう海
きて歩うをわらせたもやあ曹三宝れ世中やくか
孫をはわらて法をいくる拍を念佛をていい何ゝ宝仏
ら迷いらて只会仏を法中作爲てなゝを知ぬ安
方法門をもゝ聞よりてをう迷ゝへ鶏乃海刹
特士いゝて来孫宗ふめて発よ横孫をせを自已れ
思意ゝてしゝりときてしふのゝめて寂法の
ふ爲まひ双れ上乃ゝさらふ誠に死中ふ話をえた
形者とみえゝり夫方ハ口ふを孫を法唱へえれは
ふを何篇ぬなりやあ道心ハをけんゝりとりへを
爲阿弥施佛液を流しあせをゝめて今ハ何を源

十へ表ゝくゝく信氣れうひいしゆくふひやつ
とゆ出してゝ一家あやゆらゝハいのてう能を知
すゝをえんふう民芸挑成爲てもさうんふさうんけ
して奥院乃ゝさりゝふ庭を孫てた寄一爲ん
ふ会仏中て絶よ山中をゆ行業とゝ移てともに
七旬よ伯里大法生れ素懐をゝけ名爲ふを誠よを
難けをそれ万数てんゝれんとくりいとふ共文よ
いとゝ爲ゝ爲ゝ又温有行の為ハをそれを井に
拾らをぬ爲ゝ朔ふ栄苑をひゝくりの夕又無常乃
風ふいゝまゝむ昨日ハ累金乃家ゝかこ新輩今月
をを海の霧よ化を何そせつかれすゝゝを孤して
焼ふ三途永ゝ乃苦をまねんや出おの妓未を万

却乃限る況國家不定のさうひまはのてとやもを
楽はるか三界乃果報を苦をりつくゑとす六乃乃
月ん元を会にすわてを生をうを人るの百事見くを
むなくくてもを後をうを也九移流の厨浄せうせさ
一かあすとい人世上乃所わを覚はるにい月迷
の実多数自他乃而乃を思へともにみわや後迷
月感をおらう惑ハひかく源ふよ後よへ月なんそ
去去う嗚呼にしくならんの多を江万さすを志感
して人世乃あやまりをある事ををめは勿已

移譬物語下終

雲川臭道蔵書
江戸四日市 古今珍書倉 遠藤晨五一

寛永十六年 辛巳

七月吉日

京寺町四条上町

丹波屋長兵衛 開板

一

重

110X
488
3